Myanmar-Japan Collaboration Project for Fostering Medical Human Resources

ミンガラバー こんにちは

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL：086-224-0102
FAX：086-221-2554
URL：http://www.mjcp.or.jp

田中医療奨学金スタート

困窮留学生ら生活支援

月額5～10万円給付

ミャンマーの政情混乱は、日本で学ぶ留学生や研修生らの生活に、本国からの送金が途絶えるなどの大きな影響を与えている。そのような困窮留学生らを経済的支援するため、協会は故田中茂人理事からの寄付金のうち4千万円をもとに「田中医療奨学金」制度を設けた。奨学生第1号に岡山大学大学院医歯薬学域歯科薬理学（岡元邦彰教授）の留学生カウンタイッさん（29）が決まった。

奨学金の対象と給付は①現在、日本の医療系大学、専門学校で勉強しているミャンマー籍の学生に年間3人程度、月額5～10万円　②ミャンマーから来日し、今は医療とは別の仕事をしている人が新しく看護、介護福祉、リハビリなどの分野に転職をめざして、それらの教育機関に入学する場合、年間3～5人程度に授業料や生活費として月額5～10万円。

故田中茂人理事

協会は日本語とミャンマー語、英語の案内書を関係先に配って応募を呼びかけており、岡田茂理事長と理事数人による書類審査や面接で給付を決定する。返済義務はないが、毎年審査を行い、場合によっては継続を取りやめる。

故田中理事からの寄付5千万円について協会は当初、ミャンマーでの医療系学生への奨学金支給と、MAJA（ミャンマー元日本留学生協会）の新築ビルの「田中ホール」寄贈にあてることにしていた。それがクーデターによって奨学金制度の実施は難しくなり、ホール寄贈も保留している。

新しく日本国内の医療系のミャンマー留学生らを対象に経済的な支援をする奨学金制度の設立は8月の総会（文書開催）で承認された。

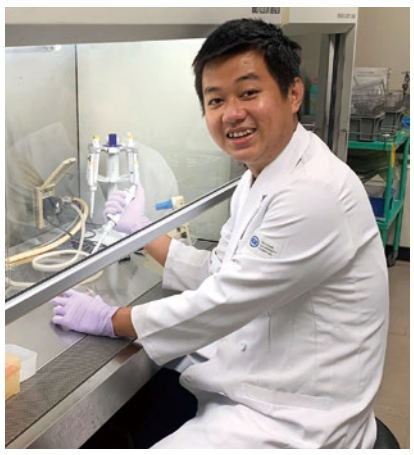
奨学生1号は岡山大留学生

田中医療奨学金の最初の奨学生に決まった岡山大学大学院生カウンタイッさんはヤンゴン歯科大学卒。

日本の先進的な歯科医療を学ぶのが希望で、その前に日本語を身に付けようと、ヤンゴンで日本語学校に通い、2019年に来日して神戸国際言語学院で勉強した。

21年4月、岡山大学博士課程に入学。歯周病に興味を持ち、骨を吸収する破骨細胞の研究を岡元邦彰教授らの指導で行っている。

卒業後は日本で研究を続けた後、帰国してミャンマーの歯科医療の発展に努めたいという。


研究室のカウンタイッさん

コロナ拡大と政情混乱

活動できず、大幅縮小

協会の今年度事業費決定

今年度の協会の総会は、コロナ禍の影響で会合を開くことができず、昨年度に続いて会員には書面で議案に対する賛否を問う「書面開催」となった。

8月下旬、集計の結果、返事のあった会員全員の賛成で2021年度（2021年7月～22年6月）の事業計画と予算が承認された。

予算は一般会計1865万円、特別会計5551万円の合計7416万円に上ったが、このうち事業費は892万円で、例年に比べて大幅に減った。コロナ拡大に加えてミャンマーの政情混乱でほとんど活動ができないからだ。

毎年、ミャンマーへ出かけての講演や研修、検診、手術指導などを行ったり、逆にミャンマーから医師や検査技師ら医療関係者を招いたりしてきたが、中止せざるをえなかった。また中断している准助産師育成事業や医療機器管理人材（メディカル）の育成計画も再開の目途が立っていないのが実情。

このため、予算では予備費として一般、特別会計合わせて6312万円を計上しているが、現状では大半が来年度への繰越金となりそうだ。

2021年度予算

〔収入の部〕　（単位 円）

費目	予算額 一般会計	予算額 特別会計	説明
繰越金	11,140,164	55,411,339	前年度より繰越
受取会費	1,300,000	0	会費130人、賛助会費10人
寄付金	3,500,000	100,000	一般寄付金、運営協力費
助成金	2,500,000	0	永山積善会、渋谷育英会、その他
雑収入	210,000	0	預金利子、協賛金等
合計	18,650,164	55,511,339	

〔支出の部〕

費目	予算額 一般会計	予算額 特別会計	説明
事業費	3,400,000	5,520,000	**特別会計** ミャンマー医療人の研修・研究支援・日本語学習支援・専門学校授業支援等に関する事業（初年度分）　5,520,000円 （滞在支援　月額70,000円、3人、12ヵ月▼日本語学習支援500,000円、3人▼専門学校学習支援　500,000円、3人） **一般会計** 滞在支援　1,680,000円(月額70,000円、2人、12ヵ月) 組織活動の公表に関する事業 800,000円 その他経費　920,000円（旅費交通費、通信運搬費、業務委託費、地代家賃〈宿舎分〉、保険料等）
会議費	100,000	0	役員会等
旅費	100,000	0	出張旅費
光熱水費	250,000	0	電気、ガス、水道代等
通信運搬費	200,000	0	郵送、電話代・インターネット使用料等
消耗品費	200,000	0	事務用品
印刷費	30,000	0	総会資料印刷代
諸謝費	50,000	0	講演等謝礼
負担金支出	5,000	0	岡山県国際団体協議会等負担金
支払手数料	40,000	0	郵便振替手数料等
委託料	400,000	0	会計事務委託、決算書作成委託料
地代家賃	750,000	0	賃貸契約に基づく固定資産税(事務所分)
予備費	13,125,164	49,991,339	
合計	18,650,164	55,511,339	

寄稿

ミャンマー情勢、解決の糸口は

元毎日新聞アジア総局長
兼ヤンゴン支局長
春日　孝之

統一政府は国軍と政治対話を

ミャンマーでの国軍クーデターから8カ月が経ちました。市民派の「統一政府」が少数民族武装勢力と連携して武装闘争に突入し、国軍と大多数の国民の間の分断は深まるばかりです。コロナ禍に加え、経済が停滞し「持たざる人たち」の困窮が深刻になっています。

今の惨状を招いた一義的な責任が、国軍のミンアウンフライン最高司令官にあることは瞭然です。ただ、今なお非難に終始しても、解決への糸口は得られません。では、どうすれば良いのか。お叱りを承知で私見を述べたいと思います。

「国軍を解体し、革命を成し遂げるしかない」。多くのミャンマー人がそう切望します。日本でも、支援活動をしている人たちの中には「国軍には1ミリたりとも妥協すべきでない」と主張する人がいます。しかし、これは極論であり、暴論だと考えます。

クーデター直後、日本の元ミャンマー駐在大使が「アウンサンスーチー氏も責任の一端を負うべきだ」と発言しました。テインセイン政権時代、現地に駐在していた私も同意見でした。私は当時、最大野党を率いたスーチー氏が大統領と二人三脚で民主化を進めることが望ましいと、繰り返し論評しました。緒に就いたばかりの民主化です。まずは党派を超えて国造りの基盤を固めるべきではないかと思ったからです。

しかし、スーチー氏は大統領や国軍との対立軸を鮮明にします。2015年の総選挙で圧勝して以降は指導者として専制的な顔をのぞかせ、国軍を政策決定から遠ざける姿勢を強めます。こうした政治路線がクーデターへの土壌を醸成した、と私は分析しています。ミャンマー独立の礎となった国軍の排除を、スーチー氏は急ぎ過ぎたのかも知れません。

非暴力主義へ回帰を

最高司令官がクーデターによってテインセイン時代への回帰を目指そうとしたことは明白です。これに対し市民派は徹底抗議し、不服従運動を開始します。ここまでは最良の選択でしたが、国軍の無慈悲な武力弾圧に直面し、テロも辞さない武装闘争の道を選びます。このままでは、時代状況は旧軍政期にまで戻ってしまいます。

国軍は警察や諜報機関を包含する強大な「暴力装置」です。同じ土俵で戦うことは、機関銃に竹やりで臨むのに等しい行為です。しかも「敵の敵は味方」の論理で成立した武装勢力との連携は、革命が成就したとしても、その後の政争や内乱で未曽有の混乱を生じかねません。私は長年、アジア・中東でそんな現場を取材してきました。

統一政府の革命路線は非現実的です。今、成すべきは非暴力主義への回帰であり、新軍政との政治対話です。国民の大多数にとっては忸怩たる思いでしょうが、「民主化をもう一度やり直す」と腹をくくるしかないと思います。

国際情勢も直視すべきです。国軍の実質統治が長引けば、「持たざる人たち」の犠牲は増えるばかりです。当面は「面従腹背」で耐えるしかないと、私は考えます。「政治は妥協」。スーチー氏は私のインタビューにそう語ったことがありました。

春日孝之さんの近著

『黒魔術がひそむ国 ミャンマー政治の舞台裏』

河出書房新社、2200円

「敬虔な仏教国」として知られるミャンマーですが、その内実を読み解くには占星術や呪術、数秘術、手相術、ウェイザー(超能力者)信仰など、今も人々の暮らしに息づく「おまじない」の理解が必要不可欠です。政治家の権謀術数に利用される黒魔術、予言通りに最高権力を得たアウンサンスーチー氏と国軍の水面下での攻防、謎のネピドー遷都の背後にあるもの、そしてクーデター計画で密かに作られた「呪いの人形」の存在…。大統領、国軍最高司令官から市井の人たちまでを幅広く取材し、文化人類学的手法を駆使した斬新な切り口でミャンマーの現代政治を描いたノンフィクションです。（著者）

コロナ猛威のミャンマー

コロナ防止にマスク着用を呼びかける国民健康財団のポスター

新規感染者6千人の日も
ワクチン　インド、中国製

新型コロナがミャンマーでも猛威を振るっている。クーデターに抗議する医療関係者に対する国軍の弾圧が、感染拡大の要因の一つになっている。

コロナの新規感染者は7月には6千人に達する日もあった。死者の合計は9月上旬、1万6千人を超えた。日本の死者数とほぼ同じだが、ミャンマーの人口は日本の半分以下。しかも、実態は当局が発表する数字よりかなり多いとみられている。

クーデター後、各地に広がった抗議のために職場放棄をする「不服従運動」は医療従事者から始まった。大勢の医師が拘束されたり、指名手配されたりした。今も職場に戻っていない人が多く、これが医療体制逼迫状態に拍車をかけた。

コロナにかかっても医療機関で治療を受けることができないと、不安に駆られた市民は自衛策をとった。自宅療養用に酸素ボンベを買い求める人が工場の前に長い行列をつくったり、免疫力を高めるために肉や卵を買う人が増えて品不足になったり、薬局に行列ができたり・・・。そんな切迫した姿が、日本の新聞やテレビでも報じられた。

ワクチンはどうなっているのか。ミャンマー国民健康財団のタンセイン理事長によると、保健省が2月に発表した計画では、6月までにインドからのワクチンを15万人に2回接種できる量、ついで中国からのワクチンで更に、年末までに2～3百万人に打ち終えるという。

風習にも一因
注意呼びかけ

タンセイン理事長は「ミャンマーでは親戚や友人、同僚と話すとき、距離を取って話すのは何となく居心地が悪いとみんなが感じる。親しい間柄では握手や抱きしめが当たり前。そんな風習がある」という。コロナを防ぐには、密にならないように、きちんと身体的距離を取ることを呼びかけるなど、同財団は公衆衛生キャンペーンを繰り広げている。

編集後記

クーデターから8カ月がたったミャンマーの政情は打開の道筋がいっこうに見えず、混迷は深まるばかりです。国際社会の対応もまた、有効な手立てが打ち出せません。国連を舞台にした話し合いは欧米と中国、ロシア間の溝が埋まらず、ミャンマーが加盟するASEAN（東南アジア諸国連合）も各国の思惑があって結束できません▼国軍と市民派の「統一政府」は政治対話をすべきだ。春日孝之さんのこの指摘は、特派員時代を含めた長年のミャンマー取材体験が裏打ちされていて説得力があります。軍と統一政府の双方に人脈を持つ日本政府は今こそ、出番です。（西﨑）